

# 2007年度前期情報リテラシー実践Ⅰ授業評価報告

基礎教育センター・教授  
永井 正洋

## はじめに

本稿では、2007年度前期末に行った、情報リテラシー実践Ⅰに関する授業評価アンケート（SE、TE）の結果を報告する。回答方法での昨年度との違いは、半数のクラスが、Network-learningシステムを用いてアンケートを実施したことがあげられる。また、内容については、アンケートの質問項目がFD委員会によって精査され、縮約されたことが異なる。

さて、昨年度と同様に本年度の入学生にも、情報リテラシーやコンピュタリテラシーに関して問うたレディネス調査を行ったが、昨年度と比べると比較的容易な情報処理スキルについての項目への回答で、意識の向上を示す有意な伸長が見られた。しかし、できるとの回答で、50%を超えている項目は13項目（全54項目中）に止まっており、情報やコンピュータを使うことができるという意識は本年度も低かった。

ここで、主に基礎・基本的な情報活用能力の育成をねらう情報リテラシー実践Ⅰは、以下の様な学習内容から成り立っている。

『情報倫理、コンピュータやネットワークの仕組み、e-mail、Web検索、文書編集、表計算、プレゼンテーション』

したがって、前述のレディネス調査の結果に見られる学生の実態には、適当な内容といえるが、授業後に彼らがどのように授業を評価したかということを通して、更に学習内容の適正を検証したい。よって、以下を本稿の目的とする。

## 目 的

情報リテラシー実践Ⅰに関する学期末の授業評価から、学生や教師の意欲やコンピュタリテラシー、また授業構成能力などの実態を明らかにし、学生の満足度に影響を与える変数を明らかにすると共に、行われている情報教育の評価を行う。

## 方 法

以下の様に授業評価アンケートを実施した。

実施時期：2007年7月9日～7月23日

学生による授業評価（SE）：

対象：首都大学東京 情リテⅠ受講者

回収数／人数：1495人／1693人（88.3%）

方法：BlackBoard（19クラス）

マークシート（19クラス）

教員による授業評価（TE）：

対象：首都大学東京 情リテⅠ担当教員

回収数／人数：39人／43人（90.7%）

方法：BlackBoard（19人）

マークシート（19人）

## 結果と考察

まず、表1を見ると、「授業に意欲的・積極的に取り組んだか」という「問1」に対して、約7割の学生が肯定的に答えている（5. 強くそう思う+4. そう思う）。しかしながら、「問5」の「授業外」での学習となると、全く勉強をしない学生と、1時間程度勉強する学生を合わせて、約85%にも上り、あまり学習していないことが分かる。次に、「問10」、「問11」の文書編集と表計算に関しては、それぞれ、68.2%、63.6%の学生が身に付いたと答えており、レディネス調査では、多くの項目で5割を超えていなかったことを考えると、授業の効果が現れているといえよう。しかしながら、「問7」の「シラバスに目標として掲げられている知識や能力を獲得できた」については、46.6%が肯定的に答えるに止まっている。これについては、アプリケーションソフトについての学習では、比較的満足できたが、それ以外の学習では、そう思えなかったことの現れかもしれない。また、「問6」の「成績評価方法について十分な説明があったか」については、肯定的に回答した学生が、35.2%であり、多くの学生は評価方法に関してあいまいな説明であったと答えており、今後の改善が望まれる。

次に図2は、各学部学系別の授業評価結果である。これを見ると、バラツキが存在することが分かるが、単に理系、文系などという観点からの差異ではないので、より詳細な調査によって今後、明らかにしていく必要がある。

続く表1では、学生による授業評価と教員による授業評価の比較を行っている。これによると、12の質問項目中、8問で両者に有意な差異があることが明らかになった。具体的には、教員の方が回答結果が高い傾向にあり、授業に関して肯定的に捉えていることが分かる。このズ

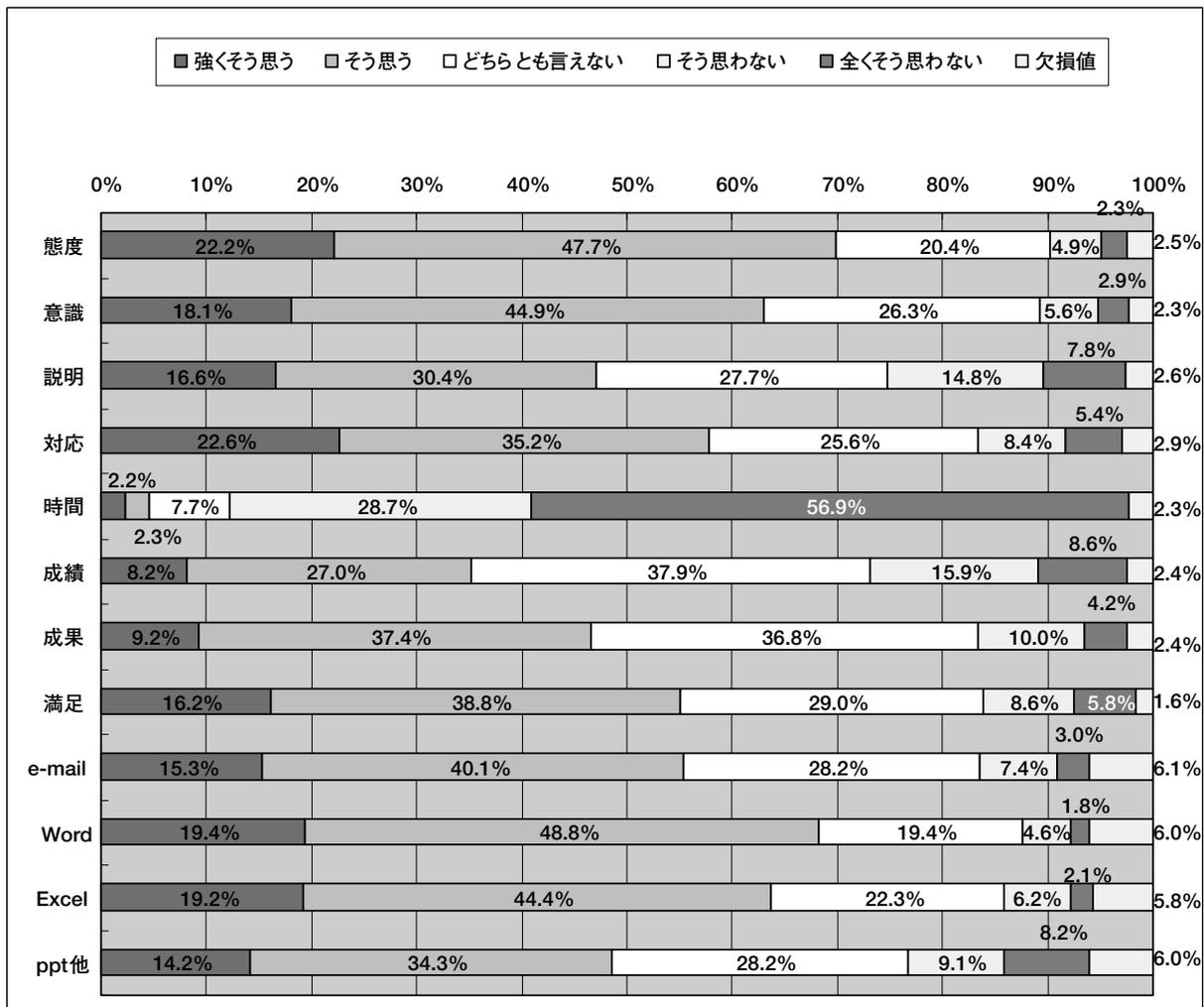


図1

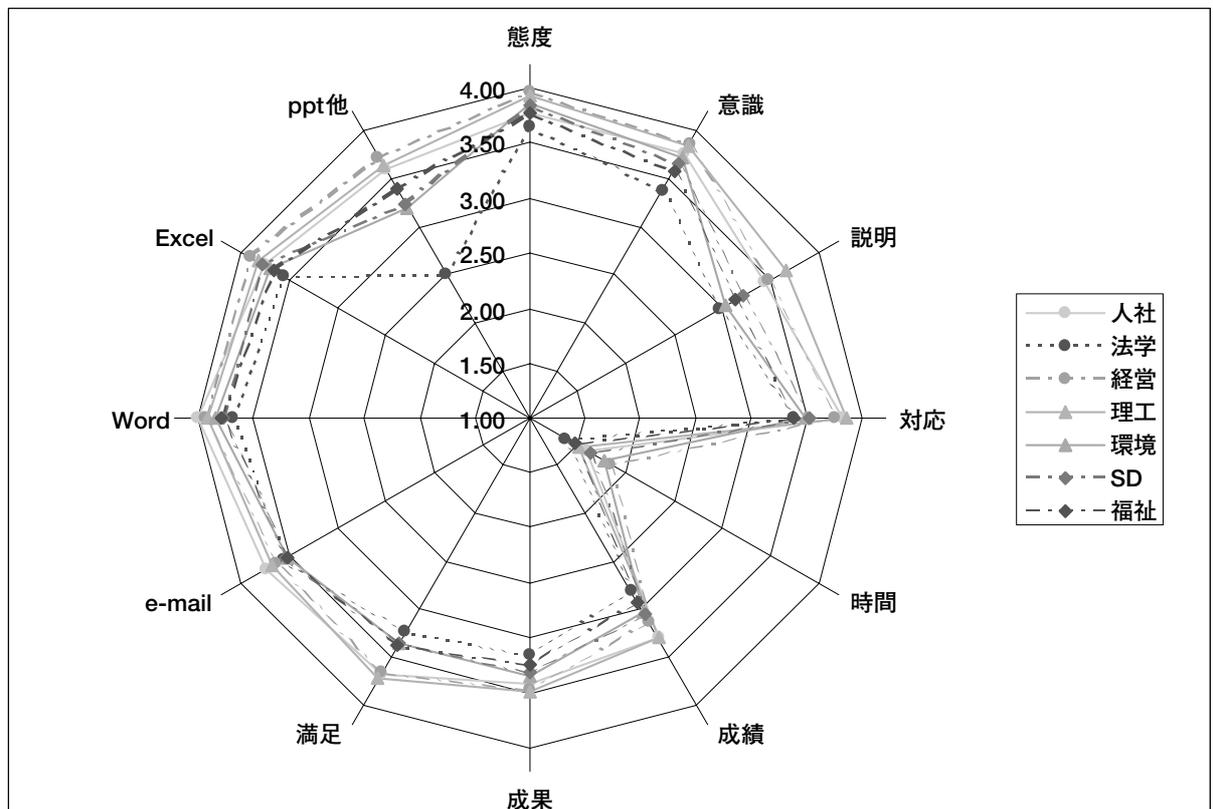


図2

	強く思う	そう思う	どちらとも言えない	そう思わない	全く思わない
<b>態度 (p=.179)</b>					
クラス	0	34	4	0	0
教員	1	28	8	2	0
<b>意識 (p=.004)</b>					
クラス	0	27	11	0	0
教員	9	25	4	1	0
<b>説明 (p=.000)</b>					
クラス	0	15	19	4	0
教員	7	25	6	1	0
<b>対応 (p=.020)</b>					
クラス	0	24	11	2	0
教員	0	24	5	0	1
<b>時間 (p=.135)</b>					
クラス	0	0	0	26	12
教員	0	1	4	21	13
<b>成績 (p=.000)</b>					
クラス	0	10	24	4	0
教員	0	22	9	0	1
<b>成果 (p=.032)</b>					
クラス	0	15	22	1	0
教員	2	36	10	2	0
<b>満足 (p=.638)</b>					
クラス	0	26	11	1	0
教員	1	22	14	1	0
<b>e-mail (p=.067)</b>					
クラス	0	24	14	0	0
教員	3	22	9	3	0
<b>Word (p=.010)</b>					
クラス	0	32	6	0	0
教員	7	20	9	1	0
<b>Excel (p=.026)</b>					
クラス	0	30	8	0	0
教員	6	22	9	0	0
<b>ppt他 (p=.022)</b>					
クラス	0	20	13	5	0
教員	0	19	9	1	2

表1 SEとTEの比較

基礎ゼミ	実践英語	情リテ	都市教養	全学共通	平均
3.76	3.19	3.52	3.49	3.13	3.418

表2 他科目との比較

レは、昨年度も観測されており、自分自身が良いと考え構成し、実践した授業であるからこそ、高めの評価になることが推察される。

最後に、図3は、満足度を規定する潜在変数を明らかにするために、共分散構造分析を行ったところである。

適合度は、GFI=.985 CFI=.991 RMSEA=.042であり、観測変数とモデルの分散共分散行列とがよく一致していることが分かる。これによると、「学生の満足度」は、影響力の強い順に、「教員の指導力」、「学生のコンピュータリテラシー」、「学生の意欲」（後者2つは同じ強さ）という潜在変数から影響を受けていることが分かる。したがって、昨年度と同様に、「満足度」はどちらかというところ、学生の主体的な学習よりは、教員の指導力に依存していることが推察される。

「問5」の「授業時間以外で一週間に平均どのくらい、この授業に関連した学習をしたか」という項目の回答は、今回の調査では、他の観測変数と共変動していないことが分かった。したがって、前述の教員依存の姿勢によれば、もし「教員の厳しさ」、「課題の量」などの質問項目があれば、何らかの因果関係があることが予測される。よって、授業外学習の機会を増加させるためには、一つには教員による直接的な指導があげられるであろう。

本年度の、授業評価アンケートでは、授業の教材やテキストの適正を問う質問項目がなくなってしまったため、直接的にそれら変数が満足度にどの程度、影響しているか掴むことは困難である。しかし、表2から、他科目の中で情報リテラシー実践Iは、比較的高い評価を得られていることと、図3のモデルで潜在変数間の因果関係は昨年度とほぼ同様であること、学生の満足度が教員の指導力からより強く影響を受けていることを考えると、学習内容は比較的、学生に受け入れられていたと推測できよう。

#### まとめ

前期末に実施した情報リテラシー実践Iの授業評価アンケートの結果の分析を行った。結果として、学生は比較的意欲的に授業に取り組んだが、授業外での学習をあまり行っていないことが明らかになった。また、アプリケーションソフトの活用に関しては、比較的良く身に付いたようであるが、それ以外の学習内容に関しては、あまり定着していない可能性があることが観測された。

学生の満足度に対する規定要因の分析では、昨年度と同様、学生の意欲やコンピュータリテラシーからの影響よりも、教員の指導力や授業からの影響の方が強くなっていることが明らかになった。この教員に依存した姿勢からは、前に授業外での学習時間が少ないことを述べたが、教員の直接的な指導によってそれが改善する余地を指摘した。また、学生の情報リテラシー実践Iの満足度は比較的高いことから、その学習内容に関しても、肯定的に捉えられていることが推察されることを述べた。

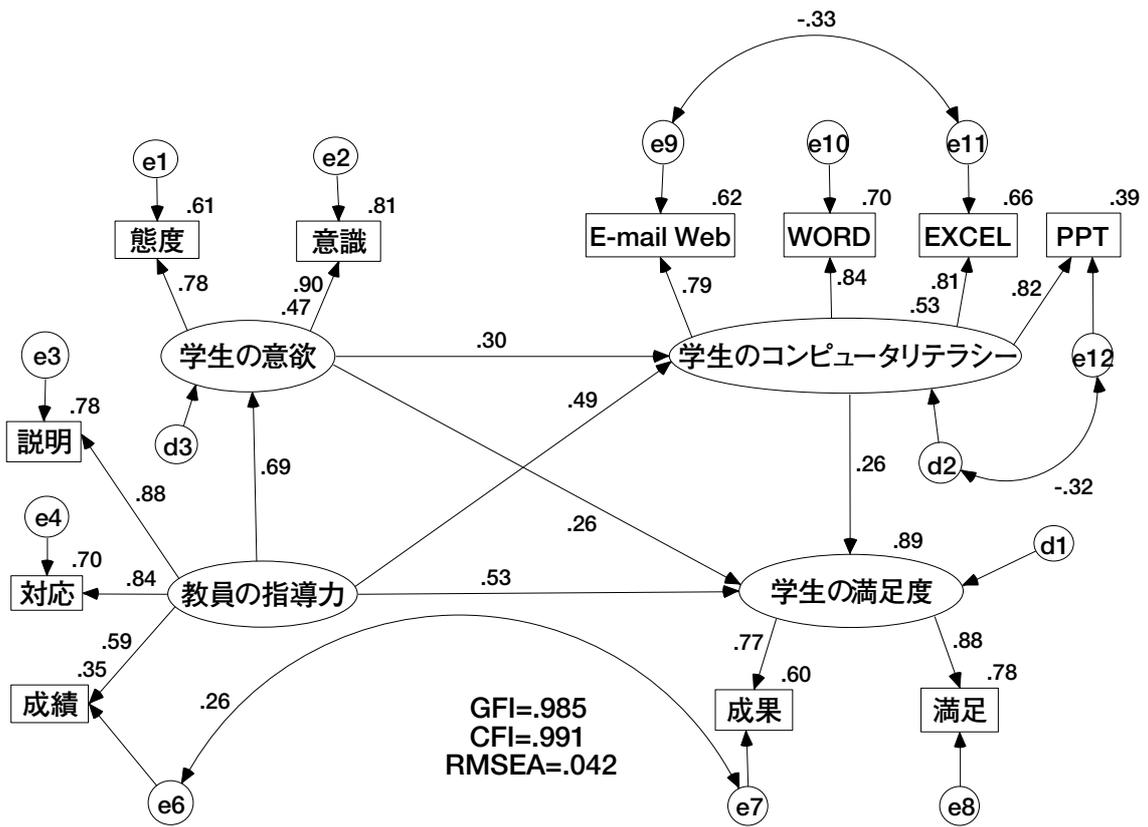


図3

参考文献

永井正洋 『2006年度前期情報リテラシー実践Ⅰ授業評価報告』  
 (首都大学東京FD委員会クロスロード, No. 4, pp.31-34, 2006)